

比文創立十周年記念文集

<https://doi.org/10.15017/18001>

出版情報：2004-02. 九州大学大学院比較社会文化学府・研究院
バージョン：
権利関係：

大連大学から見た比文

——比文一〇周年記念祭の感想——

姜 国 斌

私は比較社会文化研究科が開設された直後に修士課程に入学した学生の姜国斌です。恩師は熱帯農学研究センターのセンター長で、地球環境保全講座の教授を担当している矢幡久先生です。私がいる大連大学は九州大学よりずっと若い大学で、建学一五周年を迎えたばかりですが、発展が驚くほど速い市立大学です。主に大連に向けた大学ですが、全国へも向いています。教育学、文学、歴史学、法学、理学、工学、医学、管理学などの多学科からなる総合大学です。学生数は一人を超えています。二〇〇五年までに大連大学が中国の地方大学の中でトップクラスに達するように頑張っています。

恩師の指導のもとで「樹木耐塩性のメカニズムに関する研究」をテーマにして、私は一九九九年三月に比文で最初の理学博士号をとりました。その後、北京林業大学のポストドクターとして「北方造林樹種耐塩、耐乾燥性のメカニズム及び評価に関する研究」、日本の森林総合研究所で「樹木に耐塩性遺伝子の付与」をテーマにして研究してきました。今は大連大学生物工程学院で耐塩性を研究対象

にするほかは、「芽変毛白楊根ばえの分子メカニズム及び遺伝子操作」という国家自然科学基金項目を研究しています。帰国してからも日本での勉強、生活の様子は常に頭の中に浮かんでいます。日本の社会文明、学校の理念と教育方法、高度発達の科学技術を中国に伝えることは私の使命だといつも自分に言い聞かせ励んでいます。

比文での五年間の勉強生活は、専門知識の勉強だけではなく、国際的な雰囲気のある熱帯農学研究センターでベトナム、ラオス、バングラデッシュ、インドネシア、フィリピンなどいろいろの国の事情も知りました。比文の合同のセミナーでは、自分の研究室の研究だけでなく、酒井先生のヒマラヤ山の地質について多くの知識も教えていただきました。とても有益な勉強になりました。これは比文の理念、学府の特色によるものだと思います。

九州大学を出ても常に恩師とメールを通じて通信しています。ときどき比文のホームページも見ます。比文の教育目的、目標、比文の特色、大学教育体制の改革などへも注目しています。その中でも「比較」の視点で大連大学と九州大学を比べて、何か我が学校の教育或いは研究活動に利用できるものはないかと探しています。以下は自分が気になることについて話を進ませてください。

まずは、大学院重点化は研究型大学を作るには重要な措置だと思えます。「大学院重点化」とは、「研究科」の専攻を新しい時代に対応して再編・充実するとともに、学生定員を見直し、従来「学部」にあった教官の所属組織である「講座」を大学院に移すことにより、大学院の重点的整備を行うものです。わが国の大学では、大学の管理部門として「科学技術処」（研究管理部門）、「研究生院」（大学院生管理部門）、「教務処」（大学正科生の教育活動の管理部門）などを分けています。大学管理層

(二)この「層」は、大学の管理部門という「科学技術処」、「研究生院」、「教務処」を指しています)の下には各「○○院」を設置しています。「院」から大学院生、研究生、正科生などの教育、研究職能のすべてを行っています。比文のように学部がなく、大学院生だけを教育する学府はありますが、まだ少ないです。

次には、九州大学の学府、研究院、学部の体制改革のあり方は、私たちにとっても有益な経験になります。九大は全国初めの「学府・研究院制度」を導入しています。比文のように、大学院の教育組織である「研究科」を、大学院の教育組織とした「学府」と、教官の所属する研究組織である「研究院」を相互の柔軟な連携を図るものです。こうしますと、教育と研究の職能をそれぞれに活かして、学際的、国際的研究者養成をもっと効果的に実施できるでしょう。私は常にこの体制改革の効果に注意を払って見えています。もしこれについて何か纏められた報告書ができたならば、ぜひ教えていただきたいです。この点からいえば、卒業したけれども、学問をはじめにして教育、研究など仕事と関係している方面も母校からのご支援もいただけることを希望しています。

それに、比較社会文化学府のもっている特色は、我が大学や我が学院においても、研究あるいは教育活動の参考にできる価値があります。比文の特色は異なる社会文化の共生を目ざした研究教育、学際的なアプローチ、日本と世界を結ぶ行動人の養成、社会に開かれた学問という四点になります。その中でも核心的な内容は国際化、社会化、学際間の融合でしょう。このような考え方は日本だけでなく、中国やほかの国にも適用することができるとでしょう。大連大学では最近、「東北アジア研究センター」が成立することになりました。そのセンター長と私が話をしたとき、私から九州大学比較社会

文化学府の特色と理念を彼に伝えました。彼がこの理念に大賛成し、日本との共同研究を進めようという考えを表しました。

こういう話をし始めますと、私は、日本の大学教育に対する知識や、日本と中国の大学教育の差異に関する知識がまだまだ不十分であることを実感しています。これから専門知識の勉強だけではなく、日本の社会や教育などいろいろな方面の勉強に力を入れたいと思っています。私は九州大学比較社会文化学府の卒業生ですので、比較社会文化の精神を中国にも広げることが義務だと考えています。中国においても、各民族が違う自然環境と社会環境の中で生活し、お互いに交流を深めています。異なる文化の国家、違う種族の地域が矛盾を抱えながらも発展してきましたし、これからは発展していくでしょう。違う社会文化と自然環境を対象とする研究教育は人類社会に大きな貢献ができるはずですから。そこで比較社会文化を柱にする、誕生一〇周年の比較社会文化学府がこれからもっと日本社会だけではなく、世界に大きな貢献を与えることが期待できるように。

(じゃん ぐおびん 二期生、大連大学生物工程学院副院長・教授)

比文とイツキセイ、そして私

鄭 敬 娥

もう一〇年か、というのが正直なところである。というのも、比文の歴史はそのまま私の日本滞在の歴史であり、その一〇周年にあたって記念文集を作るといふ話を頂いたとき、何かこの間の自己評価を迫られたような気がしてならないのである。

一九九四年の春は何だかもの淋しい季節であった。ちょうどその半年前に九大法学部の研究生として来日していた私は慣れない環境でちよっぴりホームシックにかかっており、運良く合格はしたものの、日本語もままならないのにうまくやっていけるのかという不安の方が圧倒的に多くを占めていた。今は昔の形など知る余地もなくなった正門の桜の木は、ほんのわずかではあるが薄いピンク色の花びらをまだ残し、さぞ美しかったであろうという思い出だけを見せて、私の心細さをいっそう煽っていた。

入ったら入ったで、大変な日々が待ち受けていた。「集団指導体制」という多分、比文が初めて打ち出したであろう指導方式は、どこか「集団農場」を思わせなくもなかった。特定教官と学生との間

の、学問の受け渡しの関係からくる弊害を克服し、皆がよいところを出し合い、協力して新しいモノを作り出そうという意気込みは分かるような気がしたものの、私を含めて多くのイッキセイは戸惑いを感じていた。この問題は、「学際性」ともかかわってくる。従来の学問的な閉鎖空間から脱して、さまざまな分野の問題関心やディシプリンを習得するという目的は理解できたものの、それと合わせて求められる高度の「専門性」に苦しんだものだ。

上のような私の理解が果たして先生たちが考えていたものにどれだけ近いのか、今なお自信のないところであるが、当時はまさに「わけわからない」というのが本音であった。年に一度の里帰りすら面倒くさがる今の私からは想像もできないことであるが、そのときは実によく帰国し親孝行(?)したと思われる。すでに社会に出ていきいきと働いている友人たちを横目にみながら、自分はガクモンをしているのだと慰めてはみるものの、肝心なその学問とそれをやっている自分に自信が持てないという矛盾は誰よりも痛く感じていたのである。

このような悩みは程度の差こそあれ多くのイッキセイに共通しており、夜遅くまでお酒を飲みながら実によく語り合ったものだ。結果的に、「集団農場」で育てられたわれわれは、先生たちの締め付けや監視から比較的自由で、畑違いの分野をやっている同級生との何気ない日々の会話から多くの刺激を受けていたのである。「学際性」は何も学問上の多様性に限らず、年齢層にも通じていた。比文は創立当初から社会人を多く受け入れており、イッキセイの年齢分布は面白いほど広がりを見せていた。私は彼らのなかに入れてもらうことにより、自分の未熟さを思い知らされ、高いところに人生の志を置くことの大切さが分かったのだが、何よりも息のしやすさを感じた。いろんな経験を積んでこ

られた彼女・彼らは、豊富な知識を持ち合わせていたのみならず、受験勉強に勝ち抜き今おその延長線上にあるかのような緊張感を漂わせている現役院生とも違って、どこか人を受け入れる余裕があったのであろう。

そこには、当然外国人留学生と日本人の学生たちとの葛藤もあり、例えばお酒の席で歴史問題をめぐって抗論が行なわれ、しまいには喧嘩沙汰になったという話を後で聞いた。しかし、私はその話を聞いてむしろ嬉しく思った。喧嘩ができるというのは、お互いが言葉や文化の違いを超えて対等な関係に立っていることを意味しており、それだけ真剣に付き合っているという証拠でもある。そう、私たちは実に真剣だったのである。イッキセイの留学生は全員で八人であったが、私が把握しているだけでも今現在そのうち五人が日本国内で研究職についてそれぞれ頑張っていると聞く。

私は比文という限られた空間のなかで、学問のみならず、日本そのものに接することができたのだと思う。その日本は韓国で漠然として抱いていたイメージと必ずしも一致していたわけではなく、ギャップの方が大きかった。韓国で持っていた日本人のイメージは、男性の場合はポマードを塗りつけて、血も涙も無さそうな顔で感情を表に出さず、企業戦士として刀を振りかざし（その意味で、橋本竜太郎元首相はびつたりの「日本人」像を体現していた）、女性は玄関先で三つ指を立てて夫を迎え入れる、従順でお色気たつぷりの人々であった。もちろんそのような人を探す方が大変だということを知るまでにそう時間はかからなかった。多分私を始め多くの韓国人は、そのような「日本人」をある意味で笑いのものにして馬鹿にしながら優越感に浸っていたのであろう。今は、日本人なら皆が皆お金持ちであるわけでも、いつも列を作って電車に乗るわけでもないことくらいは知っているつもりである。

むしろ、青信号を待ちきれず飛び出すおじさんやおばさんたちを見ながら、私のなかの日本人が壊れていく快感に浸り、同じ人間としての愛おしささえ感じてしまうから可笑しいのである。

当然、そのような視点は生まれた故郷韓国にも移り、伝わってくる限られた情報のなかでここ何年間には本当にいやな面ばかりが目につくようになった。しかし、ここもやはり普通の人々が生活しているところ。さまざまな問題を抱えながらも、それぞれ一生懸命に生きている。それは、北朝鮮でもどこでも変わらないことである。人をその人が背負っている国籍や背景によつて見るのではなく、それぞれの内面と向き合つてこそ、本物の付き合いは始まると思われる。

さらに、それは私のやつている国際関係論にも通じる観点である。日々飛び交うさまざまな情報や宣伝、権威、先入観などに惑わされず、ものの本質を見極める努力をすることを自分に言い聞かせている。このような見方は、私を韓国人留学生としてではなく、一人の人間として他の学生たちと同じように厳しく、たまらに(?) やさしく接してくださった比文の先生たちとの関係から一〇年もかかつて培われたものである。改めて感謝の念でいっぱいである。

いま私は大分に来ていて、二〇〇三年四月から大分大学での新しい生活が始まったのである。来日してから基本的に福岡を離れたことのない私としては、誰も知り合いのいないところに行くというのはそれだけ勇気が必要とした。しかし、それは一回経験済みであったはずである。すなわち、一〇年前に日本に来たときも誰一人知り合いはいなかった。それがいま福岡を離れるということになると、何だか自分を生んで育ててくれた故郷を捨てて出稼ぎにいく一八才の少女のような気持ちになつている自分に正直に驚いた。そして一〇年という歳月の重さを改めて感じずにはいられない。

ここ大分大学は私を含めて外国人教官は二人しかいなく、実に好奇心の目で迎えられた。立場が逆転し、今度は教える側に回ったわけで責任感を感じる毎日である。ほかの世界を知らない私にとって、授業やゼミのモデルとなるのはやはり比文で自分が受けた教育にならざるを得ない。ここでは、先生と学生との関係以外にも外国人と日本人との関係も当然生じている。しかし、自分なりに工夫を重ねるとにかく学生にしゃべらせ、人の話を聞かせ、自分の頭で考える時間を作るようにしている。そのつど、私も一個人としての考えを求められるから辛いところでもある。私の北朝鮮アナウンサーの真似には大うけする彼らだが、日本自身のことやアジアとの関係については本当に知らないことが多く、いや関心がないと言った方が正しいかもしれないが、とくかく驚かされることが多々ある。しかし、自分が納得したことについては目を輝かしてその先を考えようとする。まじめな彼らの瞳のなかには確かな希望がある。日本人や韓国人としてではなく今を生きる同時代の人として日本を突き放して見る目を育て、一方通行的な関係ではなく、お互いをよりよく理解し、国際社会での望ましい姿を共に探していくのが私の課題だと思っている。修行の日々である。

大分大学の先生たちの間では「九大会」なるものがあり、卒業生たちが年に一回集まるいわゆる同窓会のようなものである。その場に今年から参加させていただいた。私も一応九大の出身者なので、当然といったら当然ではあるが、いつかは国へ帰る期限付きの留学生としてではなく、日本の社会内部に受け入れられたような気がして妙に感激したのも事実である。新入りということ自分で自己紹介した際に、「比較社会文化研究科」という自分に誇りを感じた。私の新しいアイデンティティーである。

一〇年という歳月はその精神的な成長はともかく、確実に私の顔や体力に変化をもたらした。私は

今人生の三分の一を日本で過ごし、その比率は確実に増えていくであろう。しかし、所詮時間の流れというのとは形のないものである。そのなかで、唯一その時間を確かな形で確認させてくれるのは、人と人とのつながりではなからうか。この一〇年間、大した業績は残せなかったものの、私の人生をより豊かにして少しくらいは成長を促してくれた人々に出会えたことは私の一生の財産である。そして、その空間を提供してくれたのは、疑いの余地なく比文であった。

私は人間的にも学問的にもまだまだ未熟で、まさに発展途上である。いや、むしろいつまでも「途上」であることに目標を置いてある側面があり、それがよい方向での成熟につながればいいと思っている。そして、その願いは私の母校である比文にもそのままいえることであって、組織としては未熟な点があるかもしれないが、われわれ卒業生をはじめ皆が既成の権威に挑戦し続けることによつて新たな価値が生まれてくると思う。だって、まだ一〇年ですもの。

(じょん きょんあ「一期生、大分大学教育福祉科学部専任講師)

代わりにテ・デウムを

杉 山 あかし

「教養部、清算、事業団、ですか。」

「はい、教養部清算事業団です。」

それは突然やってきた。教養部は廃止され、教養部に所属していた教員のほとんどは教養部清算事業団に回されるという。

「そうすると、草取りですか。私たちのこれからの仕事は？」

「いいえ、そんな楽な仕事ではありません。」

「すると、何をしなければならぬのでしょうか。」

「大学院を作ってください。」

「大・学・院、ですか……」

（♪軽快で浮ついたノータンキな音楽♪）

（オープニングタイトル）

これは四月からの新シリーズ『明後日があるさ』の一シーンではない。

「国際、情報、環境、つてところですかね。このごろ開設される学部や大学院の決まり文句は。ま、うちもそんなところで、よろしくお願いします。」

これは昨年やっていた企業ドラマ『踊る大学経営陣』の一シーンではない。

「これから社会学のゼミをやっていくことになりましたが、私のゼミではマス・コミュニケーション効果論やカルチュラル・スタディーズ系統の議論を中心に文化の社会的分析について考えていきます。デュルケムやウェーバーの理論を想像されていた方にはお気の毒ですが、私のゼミではあまりメジャーな議論ではなく、ちょっとマイナーな路線から攻めていきますので、よろしくお願いします。」

「……」

「よろしいですね？」

「……」

「質問はありませんか？」

「あ、あのお、デュルケムやウェーバーつて、メジャーなんですか？」

「……」

「つていうかあ、それ、何なんですか？」

「(バカ、人の名前だよ)」

「(え、そうだったの、なんかの法則の名前じゃなかったの)」

「(だからあ、なんかゲマインシャフトとかゲゼルシャフトとか言った人いたじゃない)」

「(お前、良く知ってるな)」

これはかつてやっていた学園ドラマ『翼がほしい』の一シーンではない。

……。

そして十年という時が流れた。

「先輩の今日の報告は、基本的に先日の日本社会学会での報告と同じ内容ということですよね。」

「はい、基本的にはそうです。」

「レジュメ三ページ目の頭のところ、この部分、社会学会では何か質問が出ましたか？」「いいえ、特にその部分についての質問はありませんでした。」

「そうかなあ、それでいいのかなあ……いえ、私の考えるところ、これはハーバーマスがウエーバーの議論を引き取って展開した『中間考察』における近代化論の内容を支持しているように見えながら、実際は電子ネットワーク社会における人間関係の変容がハーバーマスの近代化論を裏切っていくことを示唆するような、なんというか、極めて皮肉な現代社会分析になっているように思えるのです」

が。そうするとこの報告冒頭の現代社会観とも矛盾してくるような気がするのですが。」

「やはりそこに気付きましたか。社会学会ほど、このゼミは甘くはないですね。ご説明いたしましたように、その点についても、考えてはいるのです。……」

これは比較社会文化学府のゼミの一シーンではない。

(すぎやま あかし¹¹社会構造講座・助教授)

比文という「懐石料理」に万歳

高杉敏男・飯塚留美・湧口清隆

はじめに

二〇〇三年四月から「国際通信・経済」連携講座を開設することになった一方の当事者である(財)国際通信経済研究所(RITE)のスタッフとして、まずは比文一〇年のご功績を祝福させていただ

くと同時に、当研究所に対し連携講座開設という栄誉を与えて下さった比文の教職員の皆様方に厚く御礼申し上げる次第である。

比文の一〇年という歴史に比べ、我々 R I T E が比文と交流させていただいてからまだ一年にも満たないことから、以下に述べることは幾分誤解や偏見が入っているかもしれない。その点は先にお詫び申し上げるとして、比文に対する印象や、一年近く比文の一部の教官方、院生の皆様方などと一緒に過ごした感想を忌憚なく述べさせていただくと思う。まず、湧口が御題を切り出し、高杉、飯塚とリレー形式で繋いでいくことにしたい。

湧口 清隆

私が初めて比文を知ったとき、極めて豪華な幕の内弁当であると思った。「極めて豪華な」という形容詞は、院生の数に比べ豊富な教員組織と、(仮の造りとはいえ)独自の教育施設を有することを意味している。また、「幕の内弁当」という名詞は、社会学、経済学、歴史学、文学、言語学、国際関係論、社会情報論など文系の演習・講義から物理学、化学、生物学、地学など理系の演習・講義まで多岐にわたる内容を一か所で学び、研究することができるということを指しているつもりである。私が「幕の内弁当」という表現で講義を評するのは実はこれが最初ではない。もう一〇年以上昔になるが、私が学んでいた一橋大学で教養の講義に「総合」と銘打ったものが誕生した。家の中を探すと当時のノートが出てくるはずだが直ぐには引き出せない。記憶を頼りに記すと、英文学、物理学、スポーツ社会学あたりの三、四人の教官が、数回ずつ交代で自然と人間との関わりをテーマに講義を

されたはずである。シェイクスピアらの自然観から技術や記録の限界に挑む人間の試みまで、自然と人間との関わりを論ずる場合でも様々な視点があることに驚かされ、さらに好都合なことに一つの講義を選択するだけで様々な切り口を理解することができた。私はこれを「幕の内弁当」と評したが、それに対してある教官が講義の中で言った。「幕の内弁当」と好意的に評していただいたのはうれしいが、講義のスタッフとしては焼きたての卵焼きとキンキンに冷えたアイスクリームが隣り合わせに並んでいて、変な組合せのために学生が食あたりをおこさないか、心配だ。」

いま考えてみると、「幕の内弁当」という表現は、担当スタッフに失礼であったかもしれない。弁当屋で「のり弁当」、「すき焼き弁当」、「唐揚げ弁当」、「焼き魚弁当」等々、多種多様な弁当が陳列されていて選びあぐねたとき、とりあえず「幕の内弁当」にしておこうということが少なからずあるように思える。とにかく「幕の内弁当」にしておけば肉も魚も一通り揃っているし、どの店に行ってもそうハズレはない。しかも、どの店に行っても、だいたい入っている物は同じである。卵焼き、揚げ物、焼き魚、かまぼこ、佃煮、ご飯の上の硬い小梅……。 「幕の内弁当」は多くの人から愛され、お得なおいしい弁当であることは間違いないが、平凡すぎて個性がない弁当かもしれない。そのような「幕の内弁当」という言葉で比文を評したら、おそらく研究院長以下すべての教官方は落胆するであろうし、院生の方々も困惑するであろう。東京から福岡に通うようになって、比文を「幕の内弁当」と評するのは全く実態を反映していないし、的はずれであることが直ぐに分かった。

比文は「懐石料理」を出す料理屋である。

「懷石料理」。料理の流れは想像可能だが、店に行くまで一体どのような料理が供されるのか想像がつかない。しかも一品一品に個性があり手が込んでいる。それでいながら全体としての料理にはまともまりがある。一品一品の細かな中身は思い出せないが、食べた後にコース全体に対する満足感がある。決してお得とは言えず値が張るが、割烹や料亭とは違い、誰でも何となく足を向けられる。比文はそんな形容がふさわしい学府であるように思える。

個々の分野に関して専門家集団は存在しないのだけれども、極めて個性的な専門家が輝いている。これらの専門家が一緒になって分野を越えたいくつかのテーマを共通で追いかける。教官方の議論を通じて、あるいは演習に参加する院生の議論や研究を通じて、従来の分野ごとの専門家集団では生みだし得なかった学問的成果を上げていく。そのような場が比文なのではないか、私は今日、そのような「懷石料理」を出す料理屋である比文を羨望の眼差しで眺めている。

もちろんこの形容は、比文が克服すべき課題を挙げているように思われる。一つは総料理長にあらる比文全体のコーディネーターとなる教官方が極めて重要な役割を担っていることである。外見（というか「比較社会文化」という名称）から専門分野群が一見して理解される専門家集団ではないので、コーディネーターが個々の教官方の専門分野を理解し、比文というコンセプトの中で明確に位置づけると同時に、比文全体がどのようなコンセプトでどのような業績を上げ、どのような学問的貢献をおこなっているのかを絶えず外部に広報していかなければ、受けるにふさわしい正当な評価を外部から得られない。もう一つの課題は院生の進路である。院生は比文という環境の中で学際的で独創的な研究成果を上げる一方で、今日のジェネラリストに対する学界の評価を鑑みると、その研究成果がきち

んと評価され、それを活かす場を得ていないのではないかと危惧がある。彼らの専門家としての成果を学界のみならず、経済界や行政に対しても広くアピールし、研究成果を活かし、さらにそれを発展させていくような活躍の場を得られるような努力がより一層必要であろう。

我々 R I T E のスタッフも、比文の一員として、これらの課題の克服に最大限の努力を払っていかなければならないと認識している。連携講座参加者の専門性をアピールし、その発展に幾分なりとも貢献するであろう機会の提供に努めていきたい。

私自身の雑感であるが、比文で杉山研究室の院生方と知り合って初めて、コミケという分野に親近感を覚えた。社会的に必要とされながら市場では供給されない財・サービスをどのような仕組みで生み出すのかをテーマに、放送、映画、交通、電波などの政策を研究してきた私にとって、コミケとの出会いは極めて示唆に富むものであった。単にコミケを文化的にとらえるだけではなく、公共財的側面を持つ文化芸術財の自発的供給メカニズム（不純な利他主義、利己主義が動機づけになっている？）という点から経済学的にとらえることにより、今日わが国政府が力を入れようとしている映画・アニメ分野での制作支援政策のあり方を考察することができるのではないかと考えている。このテーマに関して院生の方々と意見を交換しながら共同作業ができれば幸せである。

高杉 敏男

湧口客員助教授が比文を懐石料理屋にたどえたため、話を引き継ぐことが難しくなっているが、私をはじめ比文発行の紀要を見たときの感想はかなり、それに近かったと覚えている。もっとも先生

方が色々の分野へ飛び出していき、その分野の専門的な比較を行い、その活動が比文という核を形成しているような感じであった。通信総合研究所当時、毎日研究に明け暮れていたが、年に二度ほど文化講話が設けられ、電気通信とはまったく異なる分野の専門家による話し、例えば、シャンソンの歴史、六法全書の精神とその構成、釈迦の教えと実社会への実践、ノーベル受賞者の家庭生活等、まったく頭のリフレッシュよりも心のリフレッシュ、研究へ取組む精神、実社会への責任等を教えられたのも異なる分野からの示唆であった。この講話の中で私が好きな言葉は浄土真宗の教えの一つである「本心に帰れ」である。各人の生活環境により解釈が色々できるところが良いところであるが、私はこの教えを、常に「人間的であれ」と解釈して、これまで色々の課題に対処してきている。比文の講座がまさに文化講話（懐石料理）にふさわしい内容のものであり、ここでの講義を受けている学生諸君は毎日、この精神のリフレッシュを受講していると思ひ、うらやましく感じている。益々の比文の発展を祈っている。

飯塚 留美

懐石料理が一つの作品となるには大変な努力が必要である。何のための懐石料理なのか、何を表現するための懐石料理なのか、まず懐石料理の世界観を設計しなければならぬ。その設計図に基づいて、多種多様な中から慎重に素材を選び、手順を踏んで調理し、心を込めて盛り付けをしなければならぬ。

こうして、作者の情熱の下に創作された懐石料理が、彩り、匂い、味わいなど、人間の五感に訴え、

人々の心を豊かにし、かつ、建設的な未来構築の原動力になったとしたら、それは完成度が高い作品といえるのかもしれない。ただ忘れてならないのは、懐石料理も、胃袋を満たしてくれる、命をつないでくれる貴重な食料でもあるということである。

比文の学生さんが、実践と理論の試行錯誤をとおして、物質的な豊かさの再検討と、心の豊かさや精神的なゆとりを忘れず、スペシャリスト兼ジェネラリストとして、白らの熱い思いや情熱を懐石料理という形でセルフ・プロデュースし、世の中を動かす原動力となつて活躍されることを心より祈念している。その一助として微力ながらお手伝いできることがあれば本当に幸いである。

おわりに

比文一〇年をお祝いするとともに、スペシャリスト兼ジェネラリスト集団として、今後の益々の発展を期待する次第である。以上を概括して「比文という『懐石料理』に万歳」という言葉で本稿を締めくくりたい。

(国際通信経済連携講座「たかすぎ」としお客員教授・いいつか るみ客員助教授・ゆぐち きよたか客員助教授)

「共生」についての雑感

高野 信治

比較社会文化研究科（研究院・学府）が開設され、早くも一〇年がたった。この間、私自身が研究・教育面で本研究科・学府の特色をいかした実績をどれだけあげられたのかは、このころもとないが、この時期はちょうどあるプライベートなことと重なる。それは私が障害者（重度知的障害）を子供として持ち育ててきたことである。そしてこのささやかな体験は本研究科・学府の特色として謳われている「異なる社会文化の共生を目指した研究教育」（『越境する文化・共振する世界』二〇〇三年六月、一頁）という問題について考えさせられる機会を与えてくれている。もちろんここでいわれている異なる社会文化の共生とはグローバリゼーションの時代の到来、ということが意識されているわけだが、その共生の問題をもう少し身近な観点から捉え直す必要もあるのではないのか、ということである。かなり独り善がりな議論になるが、日本近世史を専攻している立場からのお話にはばらくおつきあい願いたい。

話のきっかけとして社会集団というものを考えてみたい。これには、血縁集団（家族・親族集団

など）・地縁集団（村・町など）・職能集団（職人集団・商人集団など）などが想定されようが、生活圈としてわたしたちが実生活をおくっている地域をみれば、地域社会は様々な社会集団が重層的・複合的に結合し成立していると考えられる。近世日本に焦点を絞り、共生というビジョンを取って設定すれば、次のような見取り図が描けよう。

近世日本（おおむね江戸時代）は単婚を基本とした家族による小経営が諸産業を支えた時代とされるが、家族は個人の生活の基礎単位でもある。共生という人間関係ないし社会的機能を近世にも見出すことができるのであれば、これが最小単位であろう。しかし小経営は一家族で独立的にできるものではなく、村という社会集団を考えた場合、村の他の構成員との共同作業が必要であり入会地・灌漑施設も共有される。また村内の経済的有力者（「有徳」者）は小農民（小経営の主体者）の困窮を救う義務もあつたといわれる。領主権力は村の構成員を家族になぞらえ、かかる共生機能を維持させることに努めた。

近世の村では、構成員が特定の人物に自分たちの利害を代表させる惣代制・代議制のようなシステムも生まれていったが、これらの村が複数集まった組織（村連合・組合村などと呼ばれる）、あるいは大庄屋を中心にした広域行政組織（組）など、成立の契機は様々だが、村という社会集団が結合し、より広い地域社会集団も形成された。このような村や村連合・組などは主体的に地域集団の利害を領主や他の社会集団に対して主張し、地域社会集団の共生を目指したとみることができよう。

ところが、その過程で諸社会集団や地域の間には争い・もめ事・紛争も発生する。考えてみれば生活の成り立ち条件を共有しているからこそ対立もあるわけで、地域社会・諸社会集団には対抗性と共

生性が併存していたともみられるが、他方で、「共」の範囲、集団成員としての資質のようなものがあり、その限りで「共に生きる」ことが保証されていた、という見方も成り立つだろう。逆に言えば集団においてそのような資質を有していないとされるものへの差別・排除という問題である。私は近世という時代にいわば日本人像の形成と定着がみられると考えている。そのイメージの重要な要素は勤勉ということだろう。家族単位の小経営は文字通り勤勉に家職にいそまなければ立ちゆかなくなる一方で、主体的に「才覚」を働かせ「工夫」すれば、経済的富の獲得も近世では可能であった。また様々な社会集団は、その固有な職分を役として領主権力に勤めることが求められた。例えば村の場合、村請制によって年貢・諸役が賦課され、その納入が義務づけられた。その役（百姓役）を果たすことで百姓としての身分に位置づけられる。ここにも社会集団員としての役を果たすための勤勉性が求められるようになる。集団成員としての役が果たせなければ「役立たず」ということになる。そしてこのような意識（勤勉に働き仲間に迷惑かけずに果たすべき役を担い、その上で「家」相続に必要な経済的富を蓄える）は「通俗道徳」として、正直・儉約・孝行などの徳目とともに社会規範化される。しかしかかる日本人像はいわば様々な「内なる他者」を生みだす。例えば経済的にドロップアウトしてゆく社会的弱者たち、あるいは遊民といわれる人々などへの眼差しである。彼らに対しては少なからず不道徳・怠惰という烙印がおされる。

ここには小家族経営で勤勉に働く人々、主体的に働く人々、自らの怠惰により仲間（社会集団員）に迷惑をかけてはいけないと思う人々が、社会的弱者を差別していく回路が潜んでいるように思う。働くことが困難な障害者（片輪Ⅱ身体障害・愚昧Ⅱ知的障害・乱心Ⅱ精神障害）に対しても厳しい

眼差しが向けられてゆく。彼らが家族などの血縁集団や村・町などの地域社会集団などから色々なかたちで排除されていく様子を近世社会に見出すのは容易である。それは第一義的に「役立たず」を抱えておくことが困難だからである。まず領主は本人には例えは農業従事が無理であれば「相応の手業」を修得し白活すべきとする。しかし、働けない「廢疾の究者」は一定人数いるわけで、その場合には血縁共同体（家族・親族）や地縁共同体（地域社会）で「介抱」することを求める。いわば領主が出身共同体に共生を促すのである。だが、共同体からすれば「厄介者」であり、「非人小屋」「御救小屋」などに送り込まれる。

自らの立場を悲観してか共同体を抜け出す場合もある。身体障害者などは観場師などと呼ばれる仲介人を通じて見世物にされることもあった。捨てられ絶命するものもいたろうし、家族により出火などを装い殺される場合もあったようだ。

ところで、障害者の生きる道は様々なかたちで存在はしたが、多くは、非人・乞食化し勸進行為・物乞をした。このうち社会集団化したものは座頭・瞽女を除けばないが、これら障害者たちは、健常者たちとの勸進・物乞を通じた共生関係にあったといえるかもしれない。もちろんその関係には、卑賤觀念がつきまどっていたことも忘れてはならないが、ここでは、むしろ卑賤觀念から「身楽の渡世」参入願望への転化があったことを指摘しておきたい。つまり「廢疾の究」まる障害者に許されていた渡世を健常者が行い、結果的に障害者自身の渡世の場、共生の場が奪われていく、という状況である。働かなくても生活できるという地域住民の思いが、自らを障害者・病者と偽り、家職を離れ勸進・宗教活動や都市へ流入する人々の増加である。「役に立つ」健常者を「身楽の渡世」に誘引するとみら

れるためであろうか、障害者をめぐり、勤勉という道徳性と相容れない存在、あるいは憐れみを乞うばかりの存在、救済・福祉にもたれる存在という見方が生じ、さらには救済・福祉の抑止という発想も生じてくるようだ。そして、勤勉とは程遠い「役立たない」「厄介者」で、勤勉であるはずの「役立つ」健常者へも悪影響をおよぼす障害者観が成立する。

養育・擁護の放棄ともあいまって、ここには、本来地域社会の構成員である障害者との共生の可能性は展望されているとは言い難い。

このように、私が専攻している近世日本では、共生関係が集団構成員にふさわしい共通な資質（最も重要なものが勤勉性であり、社会・国家に役立つ有用性）を具備した人々のなかで成り立つ可能性はあったが、同じ人間として「内なる他者」と「共に生きる」社会性の創出は難しかったといわなければならぬだろう。そしてこのような意識は、障害者に対する眼差しがかなり変化した今日でも、基本的には続いているのを日々実感させられているというのも偽らざる気持ちだ。私の子の問題もさることながら、例えば老母が重度の知的障害がある壮年の我が子を殺すというような事件（大分県）が、現代社会でも起こっている事実は重いと思う。現代の社会が老母をして我が子をめぐり絶望の思いを抱かせるのではなからうか。

本研究院・学府はグローバリゼーション時代における共生を謳いそれは大切なことだろうが、自らが属する地域社会・社会集団に入れないまたは入ることが快く許容されない「内なる他者」（これは障害者だけの問題ではなく、例えばホームレスや独居老人などいわゆる社会的弱者とされる人々への私たちが自身の眼差しにもつながらう）の解消こそが、いささか大袈裟だが地球上の全ての人々に共有

されるグローバルな共生社会をつくる第一歩、ないしは基本であろうと私は思う。ここには豊かでないやかな人間観が必要である。

公私混同も甚だしいとの誹りをうけそうだが、比文の理念と我が子育てを重ね合わせて抱く雑感である。

(たかの のぶはる「地域構造講座・助教教授」)

渾沌は死なず

高 橋 憲 一

先日庶務掛から電話があつた。「勤続二〇周年の記念品は何になさいますか?」。そうか、もう二〇年か……。九大教養部で一〇年、比文で一〇年と、偶々切りの良い年ということになる。

比文が発足して二年後に、文部省(当時)の在外研究員として出張する機会を得たが、帰国後の数年は澁刺とした研究意欲を萎えさせるに十分なほど忙殺された。「海外で一〇ヶ月間、良い思いをしただでしょうか」という思い遣り(誰の?)であろうか、自己点検評価委員長を仰せつかった。そして卒業式に全学の関連委員会のメンバーにもなった。比文関係だけでも、『比較社会文化研究科のい

ま・平成九年度自己点検評価報告書』（一九九八）、『比較社会文化研究科一九九四・六〜一九九六——平成一〇年度自己点検評価報告書（資料編）』と『同（要約編）』（一九九九）、『同——平成一一年度外部評価報告書』（二〇〇〇）と矢継ぎ早に報告書を刊行した。

一九九九年刊行の報告書には胸中の思いを二つの文章に託しておいた。その一つは中国の古典、もう一つは散逸構造で名高いプリゴジンの言葉である。報告書の「あとがき」などは見る人も少ないだろうから、古典のほうからまず引用しておこう。

「南海之帝為儻、北海之帝為忽、中央之帝為渾沌、儻與忽、時相與闕於渾沌之地、渾沌待之甚善、儻與忽、謀報渾沌之德、曰、人皆有七竅、以視聽食息、此獨无有、嘗試鑿之、日鑿一竅、七日而渾沌死。」（『莊子』 応帝王篇）

「渾沌、七竅に死す」という有名な一条である。岩波文庫の解説によれば、「渾沌」は未分化の総合態で「自然」の譬であり、人間の有為の賢しらが自然の純朴を破壊することを象徴的に説いたもの、とのことである。しかし、今、この一条を機縁として、勝手な妄想を書かせていただこう。「渾沌」「儻と忽」を何と見立てるかで、妄想は様々に変容してくる。妄想に順序はなかるうが、ここは日本式の住居表示にならって、大から小へと移っていくと……。

地球と宇宙。ビッグ・バンと宇宙の進化、地球の誕生、生物の発生と人間の出現、とりわけ精神の誕生、これは思っただけでも榮しくなりますナア。でも、日本と世界となるとそうはいきません。昨

今の日本政府の対内外への発信、特に現首相の発言に対しては、言いたいことは山ほど出て来て、收拾がつかなくなりそうだ。場所柄をわきまえ、妄想を教育問題に追いやることにしよう。

そこで「大学」と「文部科学省」。これなら莊子に近くなりそうだ。文科省から見れば大学は渾沌の巢窟なんだろうな。しかし儻や忽のように直接渾沌に手をつけるわけにはいかない。ここは搦め手から。というわけで始まったのが義務教育での「ゆとり教育」か。難しそうなのは後で勉強することにする先延ばし戦術。昔小学校で習ったことは、今では中学校に。中学校は高校に、高校は大学に、大学は大学院に。「慣性の法則」や「世界大戦」を知らずに大学生になる子が増えている。大学院重点化とは過去数十年にわたって行ってきた政策の必然的な帰結だろう。最後にツケを払わされる大学のセンセは大変だ。これは一大学で解決できる問題ではない。それにしても日本政府は一方では「科学技術創造立国」を旗印に掲げていたんじゃないやな。教育レベルのダウンと旗印の関係は、一体どうなっているのだろう。もしかすると、文科省は密かに偉大な作戦を展開しているのかもしれない。戦後日本は奇跡的な経済復興を成し遂げ、経済大国の仲間入りをした。日本の一人勝ち（特にアジアでの）は許されない。そこで旗印は立派に掲げておきながら、レベルダウンすることで、勝ちを他に譲ろう。知的な長期低落傾向を人知れずに助長することで、五〇年来等閑にしてきた戦後補償の問題に新たな解決をつけよう。フーム、奥が深い。

文科省の政策のお蔭で、大学の外堀は埋められつつある。儻や忽は親切心で渾沌に窟をあけたのだが、それが死を招くとは思ってもみなかった。文科省も親切心なのかしらん、大学院重点化、任期制の導入等々、様々な穴を大学に掘ってきた。そして内堀から本丸へ。その極めつけが「国立大学の独

立法人化」である。これは顔に穴をあけるどころではない。顔そのものを一挙に崩壊・消滅しかねない、大穴である（競馬なら大歓迎だが）。法案は通った。しかし、ダム建設計画や干潟干拓計画が策定され実施されても見直しを迫られたように、具体化の作業でまだまだ国立大学にはやるべき手立てが残されているだろう。なにしろ、骨抜きにするのは日本の伝統的な政治手法だからである。オット、「骨抜き」とは聞こえが悪い。教育改革は行政改革（せいぜい数十年スパン）の環に解消されない国家百年の大計（大風呂敷かな）であり、今回の法案審議でそれが不十分であつてみれば、「刺抜き」しておく必要があるろう。少なくとも未来への責任がある。われわれは「渾沌」のような君子ではないから、されるがままにジットしてはいないだろうし、しておくべきでもない（と期待する）。

諸大学の中の九大、九大の中の比文となるとどうだろう。「競争的環境の中で個性輝く大学」のスローガンの下、九大はアジア志向を強めてきた。人文研究院と比文研究院の共同で、「世紀COE「東アジアと日本…交流と変容」が採択され、プロジェクトが動き出している。その成功を願って止まないが、科研費とは違って、研究成果を出すだけに留まらないところが悩ましい。組織再編が否応なしに控えている。これは混沌が自らの顔を造形するようなものだ。これ自体形容矛盾なのだが、妄想だから、勝手に取って、小講座制という固い顔と、大講座制という柔らかい顔、あるいは不定形の顔とでもしておこう。どういう顔の組織にするか。固い顔を柔らかくして、どこをどこに近づけるか、等々。さてさて、……、ここで突然アメーバの姿が出てきた。環境に適応しつつ、捕食の際に姿を変えるあの生物である。フムフム、比文アメーバ説か。

最後の妄想は比文そのものについて。これはもう渾沌そのものである。あるいは儻と忽を自らに取

り込んだ渾沌である。混乱そのものと言いたいのではない。発足以来、柔らかな組織形態を取ってきた比文はそれなりに新機軸を出してやってきたと思う。指導教官団制度と総合演習は、理念上は、そういうものであった。

一〇年経った今でもそう機能しているだろうか。この問いを前に行くと、自信を持ってイエスとは言えないのではないかと、と妄想が囁きかける。指導教官団の一員である世話人教官が学生を囲い込むことはないだろうか、昔の名前のディシプリンでまともうとしてはいないだろうか、他分野の研究だからとして質問や意見を言うのを自ら抑制してはいないだろうか、等々。教官に多くは期待できないのかもしれない。教官はそれぞれの分野で専門家となるために、分野特有のパラダイムを既に身につけている。その中で研究すべきことだけでも多々あるに違いない。確かにその通りだが、比文が「越境」という看板を掲げる限り、越境しようという意欲だけは持ち続けねばなるまい。そうした意欲を持つ教官相互の努力の中から、越境を当然とする学生が育ってくるに違いない。そう期待しよう。そう、比文という渾沌の主体は学生なのだ。可能性に満ちてはいるがまだ目鼻のたたない学生こそ、渾沌の名に相応しい。比文村の住人である教官は自らが儻や忽になる惧れに慄きつつも、暫く村に滞在しては通過していく「渾沌」という旅人を持って成すのであろう。

ここまで書くと、妄想が正気になったのか、正気が妄想になったのか判然としなくなった。しかし莊子を機縁として出て来た妄想には相応しいだろう。「莊子の夢に胡蝶となれるか、胡蝶の夢に莊周になれるかを知らず」だ。しかし、妄想だか正気だかには、そろそろ退散を願おう。そう願ったら、「渾沌は死なず、死してなるのもか」との一声を残して、妄想は虚空に消えていった。そしてその一

声は“Order Out of Chaos” (I. Prigogine & I. Stengers) に変わっていたのである。

(たかはし けんいち「比較文化講座・教授」)

「比文」雑感

田 中 良 之

「君はこの構想に反対してはいけないよ。」

一九八九年三月のある日、横山浩一先生は文学部九州文化史比較考古学部門の「引き継ぎ」として会食した際、他の課題とともに「文系学際大学院構想」の話をされ、最後をこう締めくくられたのだった。当時、文学部はこの大学院構想に賛同し、九州文化史研究施設をその柱の一つとすることを決定して、それ自体は横山学部長時代になされたものであった。おそらく先生は、「古巣」に帰った私が文学部を離れて新しい大学院に移ることを躊躇する可能性を、さりげなく断られたのだと思う。そして、これが私と「文系学際大学院」との関わりの最初であった。

それから設置までの五年間、まさに手探りのような状態で実現に向けて進んでいった気がする。「文系学際大学院」の当時の構想は文学部・経済学部と教養部が人を出し合い、大半は兼担で行う予

定の小規模なもので、「基幹講座」と「協力講座」の違いや専攻設置の基準、「マル合」「合」の基準等、何も知らずにただ案作りをしていた。ところが、大学院重点化の動きに加えて教養部が廃止されることとなり、構想は大きく変化し、かつ現実味を帯びていった。そして、その中で「資料センター」構想も浮上してきた。

私が文学部の前に在籍していた医学部解剖学第二講座には大量の古人骨と動物骨格標本を所蔵していた。これらは私達にとっては貴重な資料ではあるが、永井昌文教授の退官後に後任教授となられた柴田洋三郎教授（現副学長）のもとでは「お荷物」となっていた。また、九州文化史研究施設の古文書、教養部の昆虫資料なども改組後の保管体制が懸念されたことから、研究科に「地域研究資料センター」を併設しようとしたのである。瀧先生や有馬先生、東条先生らと行った案作りは結構楽しいものだったし、柴田先生や最初の設置準備委員長であった松永雄二先生には実現に向けて助言と学内の環境作りをしていただいた。残念きわまりないことに、このセンターは実現直前までいきながら、最後の最後に流れてしまい、「地域資料情報講座」に化けてしまったのだが、この構想は後に総合研究博物館の設置要求の際にそっくり転用させてもらった。タダでは転ばなかったのである。

さて、最後の局面で設置準備委員長として奔走されたのが志垣先生であった。京劇俳優を思わせるマスクと「決めのポーズ」をもっておられた、なんとも派手な方であった。当初は敬遠気味にお付き合いしていたのだが、高校の先輩後輩とわかったのが運の尽きで、それからはずいぶんと仕事が回ってくるようになった。平成五年の冷夏は、海外出張を三つもキャンセルし、ZARDの「揺れる想い」を聞きながら、次々とやってくる「志垣 Fax」に応じて文書や図を書いていたのだが、それはそれで

充実した毎日だった。懐かしい思い出である。

そして、「ご奉公」の甲斐あって、志垣先生と最後の教養部長であった押川元重先生には、私たち考古学分野に対していふんとご理解を頂いた。なにせ、箱崎から六本松へ引越さなければならず、そのための部屋や物品、実験室や資料室など、少なからず空間が必要なのである。比文の設置と教養部の廃止は平成六年度に同時に行われたが、改組後も六本松に居ながら学部にも所属する教官と、箱崎にいながら比文にも所属する教官が大半であった。私も部屋の問題があるので、箱崎の文系キャンパスで「開業」すると思っていた。ところが、「出来る限り六本松で」という志垣先生の意向があり、私と有馬先生のスペースも作られることになったのである。そして、私たち「基層構造講座」の実験室は本館六階の北側に頂いた。二号館の話もあったし、本館だったら南側が快適だというお勧めもあったが、私は一貫して北側の東の一角をお願いした。私には、その時、「大濠花火大会」のことしか頭になかったのである。以来、毎年八月はじめにはわれらが研究室は一大宴会場と化すこととなった。さて、比文が出来て一〇年が過ぎようとしている。最初は大混乱状態で、「学際とは具体的には何なのか？」といった議論がわりとまじめに議論されていた。院生も同様で、高揚した議論があちこちで見られた。設置直後、私は新聞に「…上に示した諸領域を学生がすべてマスターすることが私たちのねらいではない。むしろ、方法も理論的立場も少しずつ異なる教官と院生が研究教育の場を共有することによって、関連領域への十分な理解と批判力が養われることがまず重要である。そして、それをふまえ、それぞれの研究領域が相互に越境を始める。それによって、これまでの個別の学問領域にとどまらない、新たな研究領域が形成されていき、その場で育った学生にとっては「学際」はもはや

前提となることだろう。」と書いたりしたのだが、一〇年後の現在は、さてどうであろうか。

とはいえ、この一〇年の間に多少のノウハウも蓄積され、それなりに形が出来てきたように思う。院生の論文が学会誌に掲載され、一定の反響を呼ぶようにはなった。課程博士も一定数出るようになり、私達の分野からも出た。卒業生の対外競争力も捨てたものではなく、とうとう卒業生が私の出身講座の講師に就任するまでになった。

と、こう書いてしまうと、順風満帆のように見えるだろうが、実はそれほど安穩でもない。有馬先生のひと頃の口癖でもあるが、「そこそこ」出来ている状態が一番アブナイのである。たしかに、教育研究は一定のペースで出来るようになったし、院生もそれなりの落ち着きをみせてきた。学界の評価もある程度は獲得したと思う。しかし、ある意味高揚感が不足したこの状態は、現在在学している院生にとっては不幸かもしれない。院生たちも「比文の伝統」などというコトバをそろそろ口に始めているかもしれないが、それは保守化と退嬰の始まりであろう。

このような状況で、平成一四年度から二一世紀COEプログラムに採択されたのは僥倖以外の何ものでもないだろう。これは人文科学研究院と「合弁事業」ではあるものの、日本社会文化専攻が中核拠点であることからわかるように、比文のこの一〇年に対する評価の表れでもある。そして、このプログラムが研究のみでなく教育も対象とすることから、研究と教育に新たな展開が求められてもいるからである。このプログラムはしかも、社会の期待を受けたものであり、その成果は当然、潤沢な資金と見合うだけの高度なものを要求される。これによって、私達は再び個々の経験を脱して新たな「混乱」の中に身を置くこととなった。院生も同様である。この「混乱」が新たな比文の活性化に繋

がることを期待したいものである。

(たなか よしゆき「基層構造講座・教授」)

日本語教育講座一〇年目の雑感

因 京 子

大学生であったころ、世の中に「日本語教師」という職業があるとは知らなかった。「外国人が日本語を習う」というのは、「日本人がスワヒリ語を習う」などということよりもずっとリアリティがなかった。外国人と意思疎通を図るには専らこちらがあちらの言語を習得すべきなのだと思い込んでいて、その逆があり得るとは、ましてや日本語を教えることが職業として成立するほど多くの習い手が出てくることがあるうとは、想像すらもしなかった。それが今ではこの有様である。日本語学習者が増え、日本語教師という存在が珍しくもないものになった。日本語教師志望者もわんさかいて、比較社会文化学府の入学試験のときには日本語教育講座に身を置く教官は息つく暇もない。朝から晩まで面接が続いて、栄養ドリンクの一本も補給してもらいたいのだなどと愚痴の一つも言いたくなくなるのだが、そんなことを言ったりしては罰が当たる。いろいろな語学の中には科目の存続をかけて

奮闘しているものもあるというのに、誠にメデタイことではある。

しかしながら、大した宣伝も集客努力もしていないのに人が集まるという事態は、実は危ういものなのかもしれない。上り坂のあとには下りが待っている。下りならよいが、いきなり崖かもしれない。ここ十数年、日本国内でも海外の多くの場所でも日本語教育は一大成長産業であった。比較社会文化学府で日本語教育を専攻した人々も、卒業後その多くが専攻を生かして職を得ている。大学の教官として活躍している人も少なくない。もちろんこれは、我が学府の学生たちが優秀だったということなのであるが、近年の「好景気」に支えられた面もある。好景気の間は大きな問題も起こらず、やっていることについての問い直しも行われぬが、どんな好景気にも終わりが来るということは、とつくにわかつている。

日本国内に関して言えば、日本語教師志望者は供給過剰になっている。一頃かなり緩んだ海外からの留学生に対する入国審査が最近また厳しくなり、今後は、留学生数とそれに伴う日本語教師の需要にはこれまでほどの伸びは期待できないだろう。就職という直接的報酬が得にくくなってくる中、日本語教育について学ぶという体験から何が得られるか、何を得させることができるか、学ぶ側も教官側ももう一度篤と考える必要があるだろう。自分の仕事にゆるぎない情熱を持っている人にはそれを生かす場がきつとある。ちゃっちゃと手順を覚えて資格を得て仕事をゲット！という期待が成り立たなくなつたところに、却って逞しい芽が育つかもれない。

海外を見ると、近年、中国だけでなく、韓国、台湾、タイなどでも中等学校の科目として日本語が導入され、日本語熟は当面続いているようである。こうした状況を背景に、日本語教育を専攻して白

国で日本語教師になろうとする外国人が比較社会文化学府にも例年数多く志願してくる。志願者の中には、研究論文作成を必須とする現在のシステムに必ずしも適合しない者が相当数含まれているように思われる。もちろん、教育方法や日本語の言語学的特徴について研究したいと考えている人も多く、そういう人たちが入学してくるわけであるが、一方に、日本語そのものを徹底的に学ぶことの方により強い意欲を感じる人々がある。社会の要請に応えるという観点から言えば、例えば修士課程については現行のような研究指向のプログラムと並行して、こうした人々のために適切な訓練を与えるプログラムが提供されてもよいのではないだろうか。日本語訓練型のプログラムを修了してから改めて研究指向のプログラムも履修したいという人には、早期卒業の制度が機能するだろう。こうした複線型のプログラムが提供できれば、日本語の実務家の養成に貢献できるだけでなく、研究指向の人々に対する教育もずっと効率よく行えるようになるのではないだろうか。

良くも悪くも「国際化」はこししばらく「黄門様の印籠」のようなものであったから、国際化に関連することには熟した果実のような匂いがするらしい。日本語教育も、目玉と持ち上げられたり癌細胞と罵られたり、当事者の考えとは全く無関係に期待されたり邪険にされたりする。いや、これは一般論で、ここの学府の話ではない。しかしながら、ブームになろうがなるまいが、言葉を勉強したり教えたりすることはもともと地味で根気のいる、苦しいことの多い作業なのである。こうした作業に携わろうとやってきた過去一〇年の入学者たちの顔をあれこれ思い浮かべると、一つ一つが天から降る花びらのように思えてくる。これから先にもきつと素晴らしい学生たちとの出会いが待っていると、それだけは信じていることができる。

(ちなみ きょうこ 日本語教育講座・助教授)

私は比文

鄭 璣 鉉

一、比文との縁

わたしはいつも縁を大切に思っている。わたしと九州との縁は、父、叔父から始まった。二方は若い時代に仕事の為に九州に五年ぐらい滞在したことがあった。わたしも五年前有田マラソン大会に参加した後で九州地域をしばらく旅行をしたことがあった。当時の良い感じが縁となって、九州大学大学院比較社会文化学府に入学することになった。実は、わたしは大韓民国の国家公務員であり、選抜された政府派遣留学生である。

博士課程で比較政治学を勉強するために、何よりも立派な指導教授に会うことができ、大学で思い切り勉強することができる機会が与えられたことに対して心から感謝している。最善を傾注して勉強して得た知識で、国家発展、特に韓日関係に少しでも寄与したいと考えている。

二、量よりは質を、表よりは中を

わたしたちの大学院は外見は環境がとても良くないようにみえる。お世したものらしいとみえます。キャンパスがまず市内の中心の大通りとなり位置していて、各種車輛の騒音などが本当にひどいものである。それから建物が大変古くなって施設が良くないようにも見える。

しかしこれは杞憂である。市内の中心と大通りに面しているのでむしろ交通と用務に便利である。校舎は老朽化した建物のようにみえますが、中に入って行ってみれば本当にきれいだし、しずかで学問の殿堂として遜色がない。また小さなキャンパスの中で学生たちの為に研究室、図書館、パソコン室、体育施設などがよく準備されてあって学校生活がとても満足している。何よりいいのは、たくさん立派な教授陣からいつでも思い切り習うことができることである。

これは学生たちには一番価値のあるプレゼントである。世の中の万事が同じであるが外観だけ華麗で実益がなければ、無意味である。特に学問の殿堂において…。

三、一学期を終えて

まず博士演習と博士総合演習の二回の発表の場を通していろいろな能力が向上したようである。何よりも表現能力である。日本語がまだ足りないがそれでも発表して討論する過程で熱心に研究した結果、だんだんよくなることを確かに感じていることはもちろん、言語の駆使能力が言葉だけで終わってはいけないと考える。

言葉よりはむしろ実質的に重要なものは、文章で完璧に表現することであると自分は考えている。

講義の中やまとめの時間になされる指導教授の適切な説明は、曖昧とした部分とわからなかった部分が明快に整理される感じとともに学問的な意欲を振作させる。

次に博士特別研究指導である。わたしのテーマは韓国政府は日本政府の安全保障に関して政策を比較することということができるがそのあいだ指導教授からテーマ選定、目次構成それから参考書籍などに關して詳細な指導を受けた。特に指導教授が紹介する本はいい参考となっている。

論文の目次構成は定まりました。来年からは本格的に論文作成に集中しようとしています。設定した目標に向け、絶え間ない努力で前進して行かなければならないと思っています。

四、課程について

わたしが日本にきて知った特異な制度のひとつが、大学院で修士課程と博士課程が共に勉強をすると言うことである。この制度はまだ理解できない。

わたしが韓国で修士課程を勉強するときには、修士課程と博士課程が二元化されていた。

わたしの個人的な考えですが、修士課程の学問は主観性より客観的論理がより重視されると考える。

博士課程は客観的理論よりは主観的思考と理論が結集して論文の深みが修士課程より増すと考える。そこで可能なら博士課程は個々人の学生が先生から直接指導を受けながら研究する問題を増やしたほうが結果を出す助けになるのではないだろうかと考える。もちろんセミナー、発表会などの場合は例外であると考ええる。

結論的に話せば、わたしたちの大学院で現在施行している博士特別課程を活性化して発展させれば

もう少し理想的な方法になるのではないかと考える。

五、現場授業も並行を

わたしたちの大学院は主に文系の大学院である。しかし時々専攻分野の現場に直接参与して研究し、発表する制度を導入すればそれこそ机上の空論ではなくて理論と事実を接木して発展させるのに寄与すると考える。

特に外国の大学と機関及びNGOなど各種団体との協助を通じて、関連分野に研究が持続的且つで相互的に成り立てば比較社会文化の発展に一層拍車がかかるだろうと信じる。

六、職場及び職業を通じた経験にも比重を

あるいは比較社会文化学府は他の大学院と比べて少しは特殊な大学院ということが出来る。

したがって入学選抜の試験で職場及び職業を通じた経験に部分的に比重を置いて、長期的に理論と実務を接ぎ木させれば各々の分野でたくさん効果を期待することができると考える。

七、大学院に望むこと

一番先にわたしが提案したいものはわたしたちの学生手帖製作である。

教授、教職員、学生（OBを含む）などの住所録等を知ることが出来る名簿を作る事である。

特に在学中の学生の場合は写真まで掲載して相互の人間関係を構築すれば、新しい伝統が構築され

る契機になると考える。わたしが入学してそのあいだ感じるのですが、教授等學生たちに連絡をたくても連絡先がわからないという現状である。担当者に質問をしても私生活の侵害という点を勘案してやはり簡単には公開しないようだが、少しは開放する必要があると考える。

学問で結ばれた先輩と後輩それから同門との絆は社会でも伝統とで結ばれており、この連帯が社会的な貢献にもつながる。学生手帖製作は長期的にいろいろな側面で重要だと考える。

二番目は、総学生会の主管で定期的な体育大会を開催することである。学問において何よりも基本となることは体力と精神力と言える。

これらの原動力になることができる体育大会を定期的に開催して心身を研磨する時間を所有することは有意義であると考える。もちろん他大学との姉妹結縁等をつうじて行事を共にしたら意味はもっと大きいだろうと考える。その結果、現代社会人の利己主義を克服してより広い視野を持つて学問を研究することができる契機になると考える。まずははじめることが重要だと思う。結果は自然に出ることです。わたしは比文の発展のために小さいものからでも肯定的な思考で接近して、世界の中心になる九州大学の比較社会文化学府に発展することを切に祈願する。

(ちよん きひょん 国際社会文化専攻・博士後期課程在学)